

お母さんが腕の中で守り抜いた小さな命。

● 埼玉県／中村正文さん

日 曜の午後、芝生が広がる鎮守の森の公園に、元気な声が響き渡ります。

埼玉県飯能市に住む小学5年生の中村斗哉くん(11歳)と2年生の天柗くん(8歳)。2人はとても仲良しの兄弟です。

「この鎮守さまには家族4人でよく散歩にきました。春になると、桜の木がみごとな花を咲かせるんですよ」
両手を2人に引っ張られながら、父親の中村正文さん(46歳)は、ふと遠い目をします。

2010年4月6日、7年前のその日は、よく晴れた暖かい日でした。鎮守さまの桜も、きれいに咲き誇っていました。

「まだ4月なのに、今日は暑いくらいだね」

いつもと変わらない朝、そんな会話を妻の友美さんと交わしたことを、正文さんは今も鮮明に覚えていて、います。「それが、妻との最後の会話になりました。それからわずか3時間後、彼女はこの世から、突然消えてしまったんです……」



突然の事故から7年、2人の子供を懸命に育ててきた正文さん。この鎮守の森には、家族の思い出が詰まっている。「よく見る、徐行する、停止する。当たり前のルールさえ守れば、事故はなくなるはず。私たち家族4人の平穏な時間も、ずっと続いていたことでしょう」

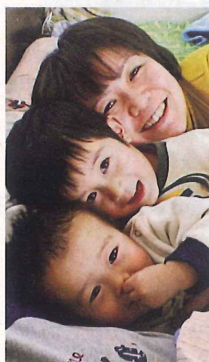
まだ1歳だった天柗くんを抱いて、自宅からほど近い横断歩道を渡っていた友美さん(当時34歳)は、交差点の左後ろから右折してきたタンクローリー車に衝突され転倒。さらに右後輪で頭を轢かれたのです。すぐに駆け寄った後続車のドライバーは、道路の上で泣き叫んでいる天柗くんを急いで抱き上げました。

「事故現場に倒れていた妻は、子供を抱く格好のままだったそうです。彼女は、命を懸けてわが子を守り抜いたのです」

運転手に下されたのは禁錮2年半、執行猶予5年の判決。裁判の中では運送会社が過労防止対策を怠っていたことも指摘されました。

深い悲しみと苦しみの中、正文さんは友美さんの死の意味あるものに変えるため、立ち上がりました。

遺族としての日々の思いを綴ったブログ「月になった妻」を開設。また、同じ体験をした交通事故遺族とともに「関東交通犯罪遺族の会(あいの会)」を結成し、安全運転管理者向けの講演を行うほか、関係省庁を



やさしいお母さんに甘える斗哉くん(当時4歳2か月)と天柗くん(同一歳8か月)。2か月後、友美さんは帰らぬ人となった。

訪れ、飲酒運転や過労運転防止への取り組み、トラックへのドライバーコーダー設置義務化を求めるなど、さまざまな活動を行っています。

「結果として数字が見えるわけではありません。でも、地道に働きかけることで、消える命が救えているかもしれない、そう信じています」

寒い季節だというのに、ひとりTシャツ姿で駆け回っている天柗くん。「寒くないの?」とたずねると、「うん、寒くなんかいないよ」と元気な答えが返ってきました。

7年前、お母さんが腕の中で守り抜いた小さな命は、お父さんとお兄ちゃんに見守られながら、しっかりと、たくましく成長しています。